地域情報研究：立命館大学地域情報研究所紀要
Journal of Regional Information and Development
The Research and Development Institute of Regional Information, Ritsumeikan University:
13-120-132 (2024)

■研究ノート

市民活動におけるコミュニティ・エンパワメントに関する文献レビュー

坂本　佳世*

【要旨】

目的：コミュニティ・エンパワメントの視点から，市民活動団体が継続・発展していくプロセスを整理し，その発展要因を明らかにする。

方法：CiNii（国立情報学研究所）を用いて，「市民活動」「ボランティア団体」「ボランティアグループ」「NPO」をキーワードに，「継続 and 要因」「エンパワメント and プロセス」「エンパワメント and 過程」を組み合わせて検出し，精査した 25 文献を分析対象とした。

結果：25 文献のうち，市民活動団体やグループメンバーを対象にしたものが 22 件，住民組織を支援する専門職を対象としたものが 2 件，コミュニティ・エンパワメントをキーワードとした文献を対象にしたものが 1 件であった。その中から，社会構造のなかで市民活動が果たす役割，コミュニティ・エンパワメントの概念・定義，個人のエンパワメントとコミュニティ・エンパワメントの関連性の 3 つの視点から文献を整理し考察を行った。

考察：市民活動におけるコミュニティ・エンパワメントとは，個人から組織，組織から地域コミュニティへと，個の自律と組織の成長が相互に発展していくプロセスであった。また，既存の枠組みにないニーズやサービスを創りだし，行政や地域に影響を与え新たな公的政策を生み出す可能性をもつことによって，活動の担い手を力づけ，さらなるコミュニティ・エンパワメントの循環を生み出すことが示唆された。

キーワード：市民活動，コミュニティ・エンパワメント，まちづくり

Ⅰ．はじめに

近年の地域づくりやまちづくりの実践は，地域や社会的課題の複雑化により，行政のトップダウン的な施策だけではなく，市民の主体的なアクションと，地域の多様な人材や組織がつながり協働的な取り組みが期待されている。その背景には，本来，地域における公共サービスを担ってきた地縁型組織である町内会や自治会などが，若年層がその役割を担うことへの負担感から加入率の低下や担い手不足によって活動が停滞するなど，地域だけでは解決困難な課題が生じている。

一方で暮らしにおけるニーズの多様化，人々の社会的孤立の深刻化，企業や行政が果たす役割の限界が指摘されており，人々の暮らしを支えるコミュニティの必要性が再び問われている（藪谷，2019）。

まちづくりを担う組織には，地域住民を中心としたまちづくり推進協議会やまちづくり

* 立命館大学大学院人間科学研究科　博士課程後期課程

会社のような企業，特定のテーマに基づいたボランティア団体やNPO団体などの非営利的な組織など多様な組織がある。ボランティア団体やNPOなどの非営利的な組織を包括して市民活動団体と呼ぶこともあるが，これらの団体はテーマ型の組織として，医療，福祉，環境保全，子どもの健全育成，防災，地域活性など様々な分野が存在する。

野中（2021）は，行政と企業という既存の仕組みの隙間で手がつけられてこなかった市民の細やかな諸問題に対し，これを発見し，支援し，必要に応じて専門家につなぐなど，社会構造的な視点から市民活動の役割を行政と企業の中間の領域に位置付けている。また，こうした既存の枠組みにない市民主体の活動は，新たなニーズ，サービスや支援を展開することとなり，新たな公的施策を生み出す可能性を持つと述べている。

しかし，市民活動を持続させていくためには，活動の財源となる収入の確保，スタッフや後継者など人材の育成，関係機関との連携など，様々な要素が必要となってくる。資金不足や人員不足などの理由で，活動が停滞することや継続困難な状況になってしまうことも少なくない。

特に，個人の主体性によって支えられる市民活動は，活動の目的や内容への共感，メンバーとの関係性，組織やコミュニティの中での個人の役割や所属感など，内発的な動機づけが重要といえる。世界保健機関（WHO）は，オタワ憲章でヘルスプロモーションを提唱し，地域活動の強化を掲げ，コミュニティ・エンパワメントという用語を使用している（野田・千田，2017）。ヘルスプロモーションは，「人々が自らの健康をコントロールし，改善することができるようにするプロセスである」と定義されており，そのための戦略として「地域活動の強化」が位置づけられ（中山，2009），主体的な市民活動が重視されていると言える。

大木・星（2006）が指摘するように，市民活動の主体性に焦点を当てると，当事者自らがコントロール力を獲得し，個人のエンパワメントとコミュニティ・エンパワメントとの相互作用は「新たな公共性」を理解するための重要な視座となる。これは，市民が積極的に関与し，共同で課題に取り組むことが，地域社会全体の発展に寄与する可能性を示唆している。

以上のことから，市民活動の継続・発展には，個人の主体性が重要であり，その主体性が活動の目的や内容への共感やメンバーとの関係性に基づいていることが強調されている。世界保健機関の提唱するヘルスプロモーションの視点によれば，人々が自らの健康をコントロールし，改善するためには，地域活動を強化することが必要であり，その中で主体的な市民活動が重要な要素となる。

したがって，今後の研究やまちづくりの実践においては，市民活動の継続・発展に向けてコミュニティ・エンパワメントの視点から，個人の主体性がどのように形成され，組織やコミュニティとの相互作用がどのように進んでいくかに焦点を当てることが重要である。これによって，市民活動の促進や地域社会の健全な発展に寄与する知見が得られると考えられる。

Ⅱ．目　的

本研究の目的は，市民活動団体が発展していくプロセスを，コミュニティ・エンパワメ

ントの視点から分析し整理することにある。国内における市民活動団体の研究を概観することによって，継続・発展的なプロセスとその要素を明らかにする。

Ⅲ．方　法

国内の市民活動におけるコミュニティ・エンパワメントに関する先行研究の文献レビューを行った。CiNii（国立情報学研究所）で検索し，出版年はNPO法が施行され市民活動が活発化した1998年以降とし，2000年～2023年で設定した。

検索キーワードは、非営利的な団体を表す「市民活動 or ボランティア団体 or ボランティアグループ or NPO」を用い、「継続 and 要因」「エンパワメント and プロセス」「エンパワメント and 過程」を組み合わせて検索した。

Ⅳ．結　果

Ⅳ．1　文献の概要（表1）

検索の結果283件が該当した。抽出された283件について，重複したものを除いた後，タイトルと抄録から43件に絞った。さらに本文を読んだ結果，NPO法人や市民活動団体など非営利的活動を行う組織の継続・発展要因やエンパワメント・プロセスについて、内的動機づけや組織・コミュニティとの相互作用の観点から研究した25文献を対象とした。25文献のうち，市民活動団体やグループメンバーを分析対象としたものが22件，住民組織を支援する看護職や保健師を分析対象としたものが2件，コミュニティ・エンパワメントをキーワードとした文献を対象としたものが1件であった。

市民活動団体やグループメンバーを対象とした研究では，インタビューやアンケート調査の質的分析から，個人のエンパワメントプロセスと，組織・コミュニティの相互作用を捉え，市民活動が継続する要因や，コミュニティ・エンパワメントのプロセスを明らかにしている。また，市民活動が果たしている役割に焦点をあて，市民活動を「新たな公共性」として捉える視点から，市民主体による公共的な活動の意義について検討したものもみられた。

地域と密接に関わる看護職や保健師を分析対象とした研究では，専門職がキーパーソンとなり，住民の主体性が引き出されコミュニティ・エンパワメントが進むことも明らかになっている。

また，コミュニティ・エンパワメントに関する文献研究においては，コミュニティ・エンパワメントの定義に触れ，個人，組織，コミュニティのレベルでまたがる概念であることや，定義が明確になされていないことを指摘し，概念の構成要素を明らかにし，コミュニティ・エンパワメントを再定義する試みがみられた。

以上のことから，本研究においては，社会構造のなかで市民活動が果たす役割や位置づけを明らかにし，コミュニティ・エンパワメントの概念や定義を整理したうえで個人のエンパワメントとコミュニティ・エンパワメントの関連性とプロセスについて考察していく。

表 1. 対象文献の要約一覧（年代順）

文献番号	著者名 出版年度	タイトル	目的	①対象 ②方法	結果
1	柳澤　久恵 他 2022	ソーシャル系大学「こすぎの大学」におけるコミュニティ継続の要因ー運営者の関わり方に着目してー	こすぎの大学における運営者の受講者に対する関わり方と，住民が通い続けるコミュニティの継続要因	①こすぎの大学の運営者6名 ②半構造化インタビューと参与観察，質的データ分析	「チームワークの形成」という内向きの働きかけと「ステークホルダーとの対等な関わり」の外向きの働きかけにより，受講者の特技や個性を引き出していた。受講者が自己成長の体感と期待を求めて通い続けることがコミュニティの継続要因と考えられた。
2	三輪　恭子 他 2022	地域ケアにおける看護職によるコミュニティ・エンパワメントの過程とコンピテンシー	地域ケアにおける看護職によるコミュニティ・エンパワメントの過程とコンピテンシー	①看護職16名 ②半構造化面接/複線径路等至性モデリングを用いた質的分析	・コミュニティ・エンパワメントの過程：コミュニティケアの志向期，創出期，定着期に区分され【動機付け】【活動準備】【ニーズ把握】【仲間づくり】【試行錯誤】【協働促進】【活動維持】の7段階があった。 ・各段階のコンピテンシーには《暮らしに着眼した課題発見力》《新しい看護活動にむけた行動力》《多様な価値観への共感力》《対話を重視した人間関係構築力》《社会資源創出に挑む遂行力》《住民の主体性を尊重したケア調整力》《事業継続に向けた管理能力》があった。
3	野中　詔子 2021	地域社会における市民活動の役割と継続の要因に関する考察 ー子ども・子育て支援に焦点を当ててー	市民活動がはたしている役割と，活動が継続していることの背景にある要因や環境	①熊谷地域において子ども・子育て支援の活動をしている市民活動団体で，相当な期間活動が継続している3つの団体。 ②半構造化インタビュー	・市民活動の役割について：先行研究からまとめた4つの役割が子育て支援の現場でも認められた。①行政と企業の中間の領域，②多元的価値観の具現や連帯の可能性を生む機能，③当事者が選択可能な支援を家族以外の第三者として行う，④新たな公共性の創出 ・支援活動の継続の要因：スタッフと財源の問題。継続要因として，次世代の支え手が生まれてくる状況や，活動の規模や形を柔軟に変化させることが重要な要素。
4	田中　富美子 他 2021	地域における子育て支援ボランティア活動の継続要因	15年以上活動を継続しているグループの継続要因	①京都府南丹市の子育て支援ボランティアグループのメンバー12人 ②質問紙	継続要因は，メンバーの現役時代の職業や社会的役割と関連があり，活動を通じて蓄積してきた経験が活かせるとともに，仲間との交流や世代間交流の機会となり，自らの生きがいとなっていることが示唆された。
5	野崎　瑞樹 他 2020	地域活動の継続に関する個人及びグループ要因からの検討	住民主体の活動の継続には，担い手や参加者の個人の内的要因と，仲間意識が影響すると推測し，長年継続しているグループを対象に，個人・グループの要因を多面的に分析。	①岩手県三陸地域において活動を継続しているグループ（M会）のメンバー ②質問紙・グループインタビュー	学習機会がグループメンバーの仲間意識を促進したり，個人の意欲を高める可能性が示唆された。
6	山村　美保里 2019	世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究ー下諏訪町湖浄連を事例としてー	諏訪湖の清掃を38年継続している団体の，長期継続の要因	①湖浄連代表・会長・役員 ②インタビュー・資料文献調査と分析	清掃や啓発などの基本的継続活動とその時々の時流による活動との組み合わせ，負担が片寄らず固定しない分担の工夫，環境の変化に即した目的の見直しにみられる柔軟性など，世代を超えて組織運営の持続性が担保されていることが明らかになった。
7	金子　仁子 他 2018	市民ボランティアによる子育て広場の運営実態と継続要因	5年以上活動を継続しているグループの継続要因と行政からの支援方策	①子育て広場を5年以上継続している8グループの各リーダー（1名から数名） ②インタビュー	継続要因には，資金や人手が得られており，実施者側に成果の実感があること，内発的動機付けが得られていることが関連していると考えられた。
8	野田　万里 他 2017	コミュニティ・エンパワメントの概念分析	コミュニティ・エンパワメントの概念が持つ構成要素と概念の定義の再構築	①「コミュニティ・エンパワメント」をキーワードとした35文献 ②文献研究/Rodgersの概念分析	定義：「誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して，組織や地域の人々が，対等な立場で互いに話し合い，合意の形成を行う中で，緩やかな絆でつながり，支え合う関係を形成し，共通の課題解決に向かうプロセス」 →支援者が，活動に共感するパートナーという意識を常にもち，グループの発展の段階に応じて住民組織と関わる必要性が示唆された。
9	羽島　剛史 他 2016	市民活動の持続可能性に関する心理要因分析	市民活動の持続可能性に関わる心理的要因	①一般市民（愛媛県今治市・松山市・内子町） ②アンケート（市民活動への参加状況・活動期間の実態・地域愛着や文化資本等を測定）	・地域愛着は，市民活動の持続可能性を高める役割をもつ。→地域の歴史を伝える教育施策や，地域に関わる記憶を想起するようなコミュニケーション施策が有効。 ・文化資本（新しい発想や技術を有するクリエイティブクラス）は市民活動の持続可能性との関連は限定的。→クリエイティブクラスも含めて地域に対する愛着意識の醸成が必要。
10	大垣　俊朗 他 2011	野宿者団体にみられる組織行動による問題対処プロセスー妥当な解決策を導出する組織構造と情報伝播に着目してー	ボランタリーな組織が冗長的な組織行動を行うメカニズムにおいて，情報交換や組織の特徴・構造がもつ影響	①野宿者の当事者団体A ②参与観察，参加者への聞き取り，半構造化インタビュー	疎外感・自己否定的なアイデンティティを持つ野宿者は，自らの問題を大勢の場で主張することが難しい。そのため，炊き出しの場において口などで緩やかに情報交換し，目的的に問題分析・抽出せずに組織を維持するのに適切な情報を抽出し，直面した出来事を解釈して対応することで組織の方針として意味づけていくセンスメーキングのプロセスであると考えられる。
11	大木　えりか 2011	障害のある人の労働の場づくりをめざした地域ネットワークの形成ー参加型アクションリサーチを通してー	A市において，障害のある人の労働の場づくりをめざした地域ネットワークを生成する基盤を固める。	①障害のある人に何らかの関りがある活動に携わっている人，または障害のある当事者 ②ソフトシステム方法論のワークショップを実施。様子をICレコーダーで記録。	①「広域連携システム」と障害のある人の労働の場を支える「拠点づくり」が必要。 ②各々が自分に何ができるか考えて実践につないでよりよい状況を生み出していきたいという思いがコミュニティ・エンパワメントにつながる。 ③具体的な改革案の策定され，参加型アクションリサーチの意義が示された。 ④コミュニティに潜在する「思い」を擦り合わせていくことで，課題と現状の変革の必要性を共有できる。
12	藤澤　浩子 2010	自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因	1980年までに設立され活動を継続してきた市民活動団体の，活動実態と継続要因	①自然環境の保全をテーマとする150の市民活動団体 ②アンケート（組織の現状，交流団体，会員，継続理由など）	団体の長期継続要因には，理性と感性という内面的要素，組織運営，活動特性，社会的要素という客観的要素，これらに重なる「地域生活密着性」があげられる。地元に密着した実践的な活動を，専門家の協力を得て積み重ね，積極的に伝達に務めるうち，共感が生まれ，社会的理解が得られていく過程が明らかとなった。
13	西尾　敦史 2010	NPOと政策形成：「民の公共」創出過程をめぐって	NPO活動と政策との間の相互作用と，その過程	①３つのNPO法人 ②事例研究 データ収集：代表らがまとめた入手可能な資料・テキスト	私（生活）領域から公（政策）領域の変容，相互作用のプロセス ①活動の出発点，②仲間の出会い，③エンパワメント，④政策創出，⑤公の変容，協働の推進と生活への影響
14	中山　貴美子 2009	住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴	住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴	①ヘルスプロモーション先進5地域における保健師 ②半構造化面接法によるインタビュー	・住民組織活動が地域づくりに発展する過程：過程Ⅰ「活動準備期」，過程Ⅱ「活動意思決定期」，過程Ⅲ「活動開始期」，過程Ⅳ「主体的活動期」，過程Ⅴ「地域展開期」がみられた。 ・保健師の支援内容：「住民の主体性を引き出す」支援を常に行いながらも「住民とともに活動する」といった支援の特徴が見られた。一方で「住民と地域を結びつける」「住民と社会資源を結びつける」ことで，活動のさらなる発展をしかけていくという特徴がみられた。

文献番号	著者名 出版年度	タイトル	目的	①対象 ②方法	結果
15	大木　幸子 2009	組織活動における公共性とエンパワーメント（メインシンポジウム	ボランティアのセルフ・エンパワーメントの過程及び活動によってコミュニティが生成される過程	①東京都内A市で活動している2つの健康な地域づくりグループの担い手14名 ②半構造化面接/修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ	①担い手は自分の内面に「生活史での『地域』体験」や「ボランティアのモデル像の存在」という＜地域の風景の存在＞をもつ。 ②「地域への関心の移行」「役割探し」「知っていて知らない居心地の悪さ」という＜内なる対話＞がなされる。 ③「漠然とした望みの意識化」「願いの共有」「活動のイメージ化」からなる＜他者との対話＞によって地域での取り組みが始まる。 ④その結果＜地域のまなざしの醸成＞や＜地域のアクチュアリティの深化＞，＜地域の解決力＞が進む。
16	成木　弘子 2009	都市での健康づくり活動に関するグループ活動を通したコミュニティ・エンパワーメント	ボランティアとして参加した中高年の住民が，活動を通してコミュニティを形成する過程と，コミュニティ・エンパワメントのプロセス	①11名の活動参加者 ②半構成的なインタビュー/修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ	コミュニティを形成する過程は，退職や転入などを機に近隣コミュニティに関わろうとする都市の中高年が，コミュニティの一員であることを認識し，コミュニティと一体感を得て活動できるようになるまでの認識の変化を示していた。また，コミュニティ・エンパワメントは，近隣地域の人々の中に“心遣いし合う”絆を形成することで，支え合う関係を作る力であることが示唆された。
17	下山田　鮎美　他 2007	エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究（第2報） ーコアメンバーらを突き動かす創発的な社会的相互作用の過程ー	「町民総ボランティア運動」コア・メンバーらの社会的相互作用の過程とその特徴。またコミュニティ・エンパワメントの関連との関連。	①コア・メンバーのうちインタビューが可能であった地域住民8名 ②半構造化面接/修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ	《コア・メンバーを突き動かす創発的な社会的相互作用の過程》の構成要素として，＜まちの事実に付与される意味世界の共有＞＜コア・メンバーとしての役割形成＞＜“私たちで”決めた＞＜創発的な社会的相互作用の基盤＞の4つが抽出された。＜“私たちで”決めた＞という感覚の高揚がコミュニティ・エンパワメントの促進にとって重要な要因であり，＜創発的な社会的相互作用の基盤＞を構成していた，まちへの思いの共有感覚を含むコミュニティ感覚の醸成も非常に重視すべき点であることが示唆された。
18	下山田　鮎美　他 2006	エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究（第1報） ーA県M町におけるソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程ー	A県M町におけるソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程と，コミュニティ・レベルのエンパワーメントが達成された要因	①同町に在住するリーダー５名 ②参加型アクションリサーチ	ソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程は，第1期＜顕在化した「願い」の共有期＞，第2期＜「願い」を媒介とした協働の創生期＞，第3期＜「願い」を支え合う協働の交響期＞という3段階によって構成。またその過程の特徴は，人々の「願い」が一貫してネットワークの根幹をなし続けていたこと，協働に関しては，町内外のキーパーソンらが，ニーズの識別から活動方策に関する合意形成，そして実践の過程に参画する実質的なものであった。
19	大木　幸子　他 2006	地域づくり活動における担い手及びコミュニティのエンパワメント過程とその相互作用に関する研究	都市における健康な地域づくり活動を担うボランティアの，セルフ・エンパワメントの過程及び活動によってコミュニティが生成される過程	①H市で活動している2つの健康な地域づくりグループのボランティア14名 ②半構造化面接/修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	・活動の場が「地域の共有する縁側」として機能し，コミュニティの生成が促進された。 ・「継続的で率直な対話は」は活動を展開させる上での大きな促進要因であり，個人のエンパワメントと同時にコミュニティ生成の基盤となる。 ・担い手は「願いを共有」して活動する体験から，地域の人々とつながったテーマであることを確認し，解決への協働の力を得ていく。
20	中島　聡子　他 2005	エージェントベースシミュレーションを利用した市民活動継続要因の考察	人の相互作用が活動の継続に及ぼす影響と継続要因	①A県の社会福祉法人（精神障害者社会復帰施設）の設立現場 ②参与観察とインフォーマル・インタビュー/エージェントベースシミュレーション（個々の主体間に見られる動的な関係性を扱う）	調査によって抽出された「共感による内集団びいき」と「共感した援助者間で獲得される内的報酬」はともにシミュレーション上のボランティアの継続に効果的に機能した。継続のためには「内的報酬が得られる相手とだけ付き合うのが効果的である」ということを意味し，ボランティアの継続には内集団が有利になる結果が導かれた。
21	桜井　政成 2005	ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異	年齢層毎のボランティア活動継続行動へ影響を与える要因と差異	①京都市内のボランティアグループやNPOで活動するボランティア ②アンケート	継続要因に配慮したボランティア活動の設計が必要。 若年層：役割が明確であり，活動の効果が目に見えて明らかでやりがいを持てるようにする。 壮年層：ボランティア同士がコミュニケーションをとれ，グループの一員としての意識を持つことができる活動にする。 高齢層：自身の技術や能力を活かし，対象者や社会の役に立っている実感をもてるようにする。
22	大木　幸子　他 2004	セルフヘルプ・グループにおける参加者のエンパワメント過程ー炎症性腸疾患患者会会員に注目してー	セルフヘルプ・グループのエンパワメントプロセス	①２つの炎症性腸疾患患者会のメンバー ②半構造化面接/グラウンデッド・セオリー・アプローチ	エンパワメントプロセスとは，①希少な慢性疾患と診断されることでの当惑，②わかちあい，③生活者としての方策の獲得，④新たなソーシャルネットワークの形成，⑤共通課題に解決に向けた共働への広がり，⑥新たな自己像の形成
23	秋山　さちこ　他 2004	住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造	住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造	①コミュニティに影響を与える住民自主組織 ②エスノグラフィー（参与観察・インタビュー）	①個人に影響を与える住民自主組織の要素：【活動形態】【役割】【ネットワーク】【組織変化】【人】 ②個人の変革プロセス：【体験と情緒的効果】【活動継続】，自己の一部の変化でもある【部分的行動変化】【自身の再発見】，自己全体の基盤となる【信念変換】，最終段階では，個人のエンパワメントのテーマを表すカテゴリーの【人生の再デザイン】を描く。 ③再デザイン後：【自分らしく】を特徴とした活動，【活動の場の広がり】，【視野の広がり】へと変化。
24	成木　弘子　他 2003	コミュニティ・ケアを目的とした自主組織活動への参加を継続する要因ー都市における事例研究ー	先駆的な活動に参加している人々の組織活動への参加を継続させている要因	①在宅福祉サービスシステムを作り上げているボランティア団体「野方の福祉を考える会」の中心メンバー ②半構造化インタビュー	人生の中で自分として「こうありたい！」と望んでいる姿勢が会の活動を通して満たされており，組織活動への参加を継続する要因は，動機付けの状態・活動の機能や構造だけでなく，「心の共有」や「豊かな社会関係の創造」の機会も重要であることが示唆された。
25	鈴木　紀子 2003	市民活動へ参加する個人に関する一考察ー横浜で活動する人の事例からー	市民活動への参加は個人の生活においてどのような意味を持ちどのように位置づけられるのか。個人はどうして活動を継続あるいは中止するのか。	①横浜で国際交流活動を行う団体に所属する経験を持つ20人 ②インタビュー/会話分析	・参加を促すもの：個人のライフステージやライフヒストリーなど，人生上の出来事や役割移行期の影響。（自分の能力を活かしたい，誰かの役に立ちたい，社会に貢献したい，生活のなかで感じる問題を自分自身の問題として捉え直し解決したい） ・参加を継続させるもの：個人的関心，活動目的への共感，人間関係の広がりのおもしろさ，団体への愛着 ・参加を中止させるもの：市民活動団体への参加は副次的な活動とみなされる。主たる活動への注力が要請されると，副次的な活動への参加は後退せざるを得ない。

Ⅳ．2 「新たな公共性」としての市民活動

野中（2021）は，市民活動が果たしている役割を検証し，(1）社会構造，(2）支援の多様性と連帯，(3）第三者の支援，(4）新しい公共性の創出の 4 つの視点による役割にまとめた。

(1）社会構造的な視点からの役割としては，一個人や家庭では手に負えず，行政の手が差し伸べられておらず，かつ企業活動としてコストがかかりすぎてなじまないといった性質の活動であり，行政の委託業務等に多く，「消極的な意味での非営利セクター論」とみなされている。同時に，(2）支援の多様性と連帯の視点からの役割は，民主主義社会における自由や多元的価値観の具現や，連帯を生む機能である。これは「積極的な意味での非営利セクター論」として分類され，その重要性が強調されている。次に，(3）第三者の支援という視点からの役割は，支援を必要とする当事者が選択可能な支援を，家族・親族ではない第三者として提供するものである。例えば，育児ネットワークが母親に影響を与える研究など，当事者が選択可能な多様な支援が求められていると言える。最後に，(4）新しい公共性の創出という視点からの役割である。新たなニーズを見つけ、新たなサービスや支援を展開することで，新たな公的施策を生み出す可能性を持つという視点である。

1995 年に起こった阪神淡路大震災を契機に，ボランティア活動や NPO などの救援活動が注目を集めた。その後，特定非営利活動促進法（通称 NPO 法）が 1998 年に成立し施行された。西尾（2010）は，こうした時代背景の中で，「民の公共」の形成過程の中でとりわけ政策に大きな影響を与えつつある市民主体による活動が，国や自治体の政策に影響を与えてきた過程のダイナミズムに焦点をあて考察を行った。その相互作用は，「生活」から「政策」へのインプット過程と，「政策」から「生活」へのアウトプット過程に分けられる。西尾（2010）は，NPO の活動事例を通して，これらの活動が，また既存の枠組みに存在しなかったからこそ，その活動自体に提案が含まれていると述べている。また，そうした生きた活動の強みがマスコミなどを通じて行政からも注目を集め，政策の視野に入ってくる。このようなプロセスにおいて形成された政策が，どのように生活に浸透していくのかというアウトプット面について，行政が，NPO と行政との協働といったテーマに気づき，認識が変容していくとも説明している。また実際の活動を行政と協働で行う中で，活動の担い手と利用者も力をつけてきていると言え，「社会を変えられるという実感」が相互依存の力（エンパワメント）に転化していると考察している。

以上のことから，市民活動が果たす役割とは，行政では手の行き届かないニーズに応えることや，既存の枠組みにない新たなサービスを生み出すことといえる。また，家族内では解決困難な課題に対して，コミュニティやネットワークを通じて支援することで，新たな解決方法が示唆されている。そして，市民活動自体が政策提言としての意味をもち，行政の変容や協働の促進を促しているといえるのではないだろうか。「新たな公共性」の視点は，西尾（2010）が述べているように，活動の担い手が「社会を変えられるという実感」をもつことや，行政の認識の変容など，相互依存的なエンパワメントに重要な意味をもつと考えられる。

Ⅳ．3　コミュニティ・エンパワメントの概念・定義

近年では，発展途上国の開発，社会福祉，教育などさまざまな分野でエンパワメント概念が用いられているが，共通した文脈は，「人々が本来もっていながら奪われていた力を取り戻し，自立していくプロセス」であり（大木・星，2004），専門家に頼るのではなく，自らが力をつけることにより，人々が社会的役割を適切に遂行することを可能にする個人，集団，地域の力量形成が，エンパワメントであるとされている（大木・星，2006）。

野田・千田（2017）は，コミュニティ・エンパワメントの定義が明確ではなく，概念的な整理が行われていないことを指摘している。文献調査によって，コミュニティ・エンパワメントの概念がもつ構成要素を明らかにし，コミュニティ・エンパワメントを「誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して，組織や地域の人々が，対等な立場で互いに話し合い，合意の形成を行う中で，緩やかな絆でつながり，支え合う関係を形成し，共通の課題解決に向かうプロセスである」と再定義した。

また，大木（2008）は，個人のエンパワメントを，「タブー性から開放され，自分自身の生活をコントロールし，決定する能力を開発する力を獲得するプロセス」とし，コミュニティ・エンパワメントに関しては，先行研究において，集団やコミュニティが社会的解決力を獲得する過程及びリーダーシップや，広域なネットワークなどのアウトカムが論じられていると説明している。

エンパワメントとは，他者との課題共有から，批判的気づきや解決力への獲得へと展開するプロセスをさし，個人・組織・コミュニティのレベルでまたがる概念であるといえる（大木，2008）。また，その過程においては，個人・組織・コミュニティの相互作用と，コミュニティ内の活動が連鎖する様相，あるいはそれらの相互作用について明らかにすることが重要であるとする（下山田・吉武・上埜，2006）。

以上のことから，コミュニティ・エンパワメントとは，個人のエンパワメントを内包する概念であり，そのプロセスは，個人が批判的気づきを得て主体性が発揮される過程から，組織やコミュニティとの課題共有や合意形成を経て，課題解決へのアクションへと向かうプロセスであると言える。

そして，そのプロセスのなかで起こる，人々の関係性の変化や相互作用の様相を描くことは，今後のまちづくりや市民活動において，新たなモデルを見出す手がかりとなり得る。

Ⅳ．4　コミュニティ・エンパワメントの相互作用的プロセス

三輪・川野（2022）は，地域ケアにおける看護職によるコミュニティ・エンパワメントの過程を明らかにすることを目的に分析を行い，コミュニティ・エンパワメントの過程を，コミュニティケアの「志向期」，「創出期」，「定着期」に区分した。「志向期」では，看護職は臨床経験や個人的経験において，制度で対応できないニーズに気づき，「創出期」では，住民や多職種との対話を通して，地域課題や活動に対する共感を得る経験から仲間づくりにつながったと考えられる。そして，実際の活動場面では，柔軟に活動を企画し，実践して振り返る過程を繰り返すことで活動を促進していた。さらに，看護職の試行錯誤の状況は，地域づくりにおいて経済協力開発機構が提唱する AAR 循環（Anticipation〈自ら楽し

いことを考える〉－ Action〈やってみる〉－ Reflection〈振り返る〉を繰り返す）の過程を示していたことを明らかにした。「定着期」では，看護職は継続的な活動資金の確保による事業の安定化や，社会の変化に対して多角的な事業展開等の対応を行うことで持続性につながったが，社会変化に対応できなかった事例では，活動維持が困難となることが示された。

中山（2009）の研究では，健康への住民組織活動の発展過程として，「活動準備期」，「活動意思決定期」，「活動開始期」，「主体的活動期」，「地域展開期」の 5 つの過程を明らかにした。「活動準備期」は，地域に健康への関心や課題をもつ人々が存在しているが，活動に取り組む組織がみられない段階であり，「活動意思決定期」は，健康づくりの活動のために新たな住民組織を結成，もしくは既存の住民組織が新たに健康づくりに取り組むことを決定する段階である。「活動開始期」は，住民組織が活動を開始し軌道にのせるまでの段階であり，「主体的活動期」は，住民組織が活動を主体的に行い，地域の社会資源として機能している段階である。「地域展開期」は，活動が地域に定着し，活動の地域への広がりや住民組織同士の連携，協働による活動がみられ地域全体で展開されている。保健師は，住民に寄り添いともに活動しながら，「住民の主体性を引き出す」支援や，「住民と地域を結びつける」「住民と社会資源を結びつける」などの，地域の人材の発掘や社会資源と結びつけることで，活動のさらなる発展をしかけていくという特徴がみられた。

三輪・川野（2022）と中山（2009）の研究からは，市民活動の発展モデルが示され，また，地域の専門職がキーパーソンとなって，寄り添い対話的な関わりをもちながら，市民の主体性を引き出すことや，地域を結びつける役割を担っていたことが明らかになった。

大木・星（2006）は，住民主体の活動を取り上げ，個人エンパワメントと地域のエンパワメントの相互作用の過程および活動によってコミュニティが生成される過程を抽出した。地域活動の担い手の多くは，「生活史の中での『地域』体験」や「ボランティア・モデル像の存在」を持っており，地域活動に参加する心理的土壌となっている。次に，活動の担い手が地域の活動へと関心が動くもう一つの契機は，ライフステージの変化に伴って引き起こされた自らの内面での対話があり，「地域への関心の移行」や「役割探し」につながっていくとする。さらに，他者との「願いの共有」により，「漠然とした望みの意識化」により動機づけられ，具体的な「活動のイメージ」を経て地域活動の始動が促される。活動を通して，活動日以外の場での自由で新しい交流が派生し，地域の中に新たな交流関係が紡がれていくのである。地域での協働活動によるつながりの深化は，「地域への信頼感」となり，「継続的で率直な対話」を重ねていく土壌を形成する。こうした過程は，地域の課題への解決力を形成し，「仲間との協働によるネットワークの拡大」や，地域との自己像の獲得につながっていく。これはひとりの力では解決できない生活の課題が，地域の人々とつながったテーマであることを確認し，解決への協働の力を得ていくプロセスであるとする。

下山田ほか（2006）は，町におけるソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程を，複数の活動やそれらに関与した人々の関係性に着目し，なぜコミュニティ・エンパワメントが達成されたのかを明らかにした。ソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程は，「顕在化した『願い』の共有期」，「『願い』を媒介とした協働の創生期」，「『願い』を支え合う協働の交響期」という 3 段階によって構成されるとした。その過程の特徴は，人々の「願い」が一貫してネットワークの根幹をなし続けていたことと，「願い」を媒介として，専門

家や組織による当事者支援がまちぐるみの協働へと発展した。そして，関与する人々が活動方策に，合意形成から実践に至るまでの過程に参画することで，「『願い』を支えあう協働の交響期（第 3 期）」に象徴されるような，社会的・組織的な問題の解決を志向する活動へと発展したことが推測された。これらの特徴は，同町の保健師らが黒子として行っていた編集（ネットワーク・マネジメント）を通じて生み出されたといえ，保健師らがキーパーソンになり，知識創造と自己組織化の促進につながったと述べている。

さらに，下山田ほか（2007）は，ネットワーク形成に参与した人びとの間に生起した社会的相互作用を捉えるため，同町で展開された「総ボランティア運動」における，コア・メンバーらの社会的相互作用の過程の特徴とコミュニティ・エンパワメントの関連を考察した。分析の結果，「総ボランティア運動」の《コア・メンバーを突き動かす創発的な社会的相互作用の過程》の最も顕著な特徴は，「まちの事実に付与される意味世界の共有」「コア・メンバーとしての役割形成」という 2 つの円環的過程が，“ 私たちで ” 決めたを結節点として連動しつつ互いを促進するよう機能していた。

「コア・メンバーとしての役割形成」は，人間は役割形成によって主体的存在になるといえ，同町において役割を形成していったコア・メンバーが，コミュニティ・エンパワメントを生みだす促進者として果たした役割は非常に大きいものであった。

「まちの事実に付与される意味世界の共有」は，マイノリティのニーズを，オープンなコミュニケーションの机上にあげ，共に解釈していくための対話の過程とも捉えることができる。このような対話の目的として「批判的思考」があげられ，個人の心理的エンパワメントとコミュニティ・エンパワメントを結びつけることを示唆している。

つまり，「コア・メンバーとしての役割形成」は，個々のエンパワメントを示す過程であること，「まちの事実に付与される意味世界の共有」は，個々のエンパワメントをコミュニティ・エンパワメントに結び付ける役割を担う過程であることを提示した。これらが連動しあいつつ相互作用的に機能することによってコミュニティ・エンパワメントが促進されるとした。

そしてこの過程において，2 つの円環的の結節点となっていた “ 私たちで ” 決めたという認識の形成過程は，コア・メンバーらによって自己決定と集団決定の両方を含んだ内容で表現されていた。

大木・星（2006）と下山田ほか（2006，2007）の研究では，個人エンパワメントからコミュニティ・エンパワメントに発展していくモデルが示され，さらにはその過程において，参与した人々の社会的相互作用が明らかになったといえる。

Ⅴ．考　察

本研究の目的は，国内における市民活動団体の研究を概観することによって，市民活動団体が発展していくプロセスを，コミュニティ・エンパワメントの視点から整理し，継続・発展的なプロセスとその要素を明らかにすることであった。

三輪・川野（2022）と中山（2009）の研究からは，個人の気づきから，住民や多職種との対話を通して，仲間づくりや組織化につながり，活動の実践や，住民同士の協働や活動が地域へ広がっていく発展プロセスが示されていた。また，そのプロセスのなかで，住民

の主体性を引き出し，住民を地域や社会資源と結びつけるキーパーソンの存在が，活動をさらに促進させることがわかった。

大木・星（2006）は，個人のエンパワメントに，「地域体験」や「ボランティア・モデル像の存在」，「ライフステージの変化」などが関係し，内面での対話を通して「役割探しに」につながっていくと考察している。そして，「他者との願いの共有」や「漠然とした望みの意識化」がより具体的な「活動のイメージ」へとつながるとし，個人のエンパワメントからコミュニティ・エンパワメントに発展していくプロセスを明らかにしている。

下山田ほか（2007）の研究においても，「役割形成」が個々のエンパワメントを示す過程であること，「意味世界の共有」が，個々のエンパワメントとコミュニティ・エンパワメントを結びつける役割を担う過程であることを提示しており，大木・星の研究と共通したプロセスを示したといえる。さらに，下山田は，「役割形成」と「意味世界の共有」の結束点となる「“私たち”で決めた」という自己決定と集団決定を含む，認識の形成過程を明らかにしている。

市民活動におけるコミュニティ・エンパワメントとは，個人から組織，組織から地域コミュニティへと，個の自律と組織の成長が相互に発展していくプロセスであった。さらに，組織の発展は，既存の枠組みにはないニーズやサービスを創りだし，行政や地域に影響を与え新たな公的施策を生み出す可能性をもつ。このことは，活動の担い手を力づけ，さらなるコミュニティ・エンパワメントの循環を生み出すことになるであろう。

Ⅵ．今後の研究に向けて

筆者は，市民活動を支援する組織に所属している。本研究の結果と自身の経験を重ねると，市民活動のゴールを，地域課題の解決ではなく，人々が身近な問題を解決していくことや自己実現を目的とするコミュニティ・エンパワメントのプロセス自体がゴールとも捉えることができた。

筆者がサポートする組織のなかには，個々がやりたいことを軸としながらも共通するテーマを持ち，組織メンバーとして一緒に活動することもあれば，個々が他の団体の活動に協力したり，新たな活動を生み出すなど，組織の継続性だけではない横の発展が見られている。継続性の観点からいえば，仕事や子育てを抱えながらの世代であれば，負担なく楽しみながら社会的活動を続けられることが重要といえる。多様な人との出逢いによって自身の世界が広がり，自己の変容や成長に動機づけられていることも解っており，実際の市民活動は，ひとつの発展モデルでは捉えることのできない，柔軟で多様なプロセスがあると感じている。

今後の市民活動の研究においては，市民活動の多様性や，ひとつの活動から枝葉のように広がっていく横の発展性にも注目し，新たな市民活動やコミュニティ・エンパワメントの在り方を再考したいと考えている。

［参考文献］

秋山　さちこ・海老　真由美・村山　正子（2004）．住民自主組織に所属する個人エンパワメント構造　日本地域看護学会誌，7(1)，35 － 40.

大垣　俊朗・本田　利器（2011）．野宿者団体にみられる組織行動による問題対処プロセス――妥当な解決策を導出する組織構造と情報伝播に着目して――　日本都市計画学会　都市計画報告集，10(2)，97 － 102.

大木　えりか（2011）．障害のある人の労働の場づくりをめざした地域ネットワークの形成――参加型アクションリサーチを通して――　ソーシャルワーク学会誌，22(0)，1 － 13.

大木　幸子・星　旦二（2004）．セルフヘルプ・グループにおける参加者のエンパワメント過程――炎症性腸疾患患者会会員に注目して――　総合都市研究，83，29 － 45.

大木　幸子・星　旦二（2006）．地域づくり活動における担い手及びコミュニティのエンパワメント過程とその相互作用に関する研究　ノンプロフィット・レビュー，6(1+2)，25 － 35.

大木　幸子（2009）．組織活動における公共性とエンパワーメント　保健医療社会学論集，19(2)，21 － 32.

金子　仁子・佐藤　美樹・吹田　晋・三輪　眞知子（2018）．市民ボランティアによる子育て広場の運営実態と継続要因　慶応義塾大学学術情報，18(2)，156 － 176.

桜井　政成（2005）．ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異　ノンプロフィット・レビュー，5(2)，103 － 113.

下山田　鮎美・吉武　清實・上埜　高志（2007）．エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究（第 2 報）――コアメンバーらを突き動かす創発的な社会的相互作用の過程――　コミュニティ心理学研究，11(1)，56 － 75.

下山田　鮎美・吉武　清實・上埜　高志（2006）．エンパワーされたコミュニティの創生過程に関する研究（第 1 報）―― A 県 M 町におけるソーシャル・サポート・ネットワーキングの過程――　コミュニティ心理学研究，9(2)，149 － 163.

鈴木　紀子（2003）．市民活動へ参加する個人に関する一考察――横浜で活動する人の事例から――　技術マネジメント研究，2(1)，28-40.

田中　富美子・佐藤　裕見子・小石　真子（2021）．地域における子育て支援ボランティア活動の継続要因　日健医誌，30(1)，108 － 114.

中島　聡子・中井　豊・古宮　誠一（2005）．エージェントベースシミュレーションを利用した市民活動継続要因の考察　情報処理学会論文誌，46(1)，147 － 156.

中山　貴美子（2009）．住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴　日本地域看護学会誌，11(2)，7 － 14.

成木　弘子・飯田　澄美子（2003）．コミュニティ・ケアを目的とした自主組織活動への参加を継続する要因――都市における事例研究――　日本健康教育学会誌，11(2)，93 － 103.

成木　弘子（2009）．都市での健康づくり活動に関するグループ活動を通したコミュニティ・エンパワーメント　保健医療社会学論集，19(2)，8 － 20.

西尾　敦史（2010）．NPO と政策形成 :「民の公共」創出過程をめぐって　沖縄大学人文学部紀要，(12)，1 － 16.

野崎　瑞樹・伊波　和恵・荻原　裕子・本間　萌・野村　豊子（2020）．地域活動の継続に関する個人及びグループ要因からの検討　日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要，34(0)，19 － 28.
野田　万里・千田　みゆき（2017）．コミュニティ・エンパワメントの概念分析　埼玉医科大学看護学科紀要，10(1)，63 － 71.
野中　詔子（2021）．地域社会における市民活動の役割と継続の要因に関する考察――子ども・子育て支援に焦点を当てて――　立正社会福祉研究，23(37)，81 － 93.
羽島　剛史・片岡　由香・尾崎　誠（2016）．市民活動の持続可能性に関する心理要因分析　土木学会論文集 D3（土木計画学），72(5)，I_407 － I_414.
藤澤　浩子（2010）．自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因　ノンプロフィット・レビュー，10(1)，37 － 48.
三輪　恭子・河野　あゆみ（2022）．地域ケアにおける看護職によるコミュニティ・エンパワメントの過程とコンピテンシー　日本看護科学会誌，42(0)，899 － 907.
柳澤　久恵・安藤　孝敏（2022）．ソーシャル系大学「こすぎの大学」におけるコミュニティ継続の要因――運営者の関わり方に着目して――　横浜国立大学教育学部紀要.，社会科学，5，10 － 2.
籔谷　祐介（2019）．まちづくり市民活動団体の人材マネジメントに関する組織論的研究　札幌市立大学 博士（デザイン学）甲第 10 号
山村　美保里（2019）．世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究――下諏訪町湖浄連を事例として――　土木学会論文集 D1（景観・デザン），75(1)，1 － 11.

Literature Review on Community Empowerment in Civic Activities

Kayo Sakamoto

Abstract:

Objective: The purpose of this study is to organize the process by which civic organizations continue and further develop from the perspective of community empowerment. Additionally, it aims to elucidate the factors contributing to this development.

Methods: Using CiNii (National Institute of Informatics), a search was conducted with keywords such as "civic activities," "volunteer organizations," "volunteer groups," and "NPO," combining them with "sustained and factors," "empowerment and process," and "empowerment and procedure." Furthermore, 25 selected publications were subjected to thorough examination and chosen as the subjects for analysis.

Results: Out of the 25 publications, 22 focused on civic organizations and group members, while 2 targeted professionals supporting resident organizations. Additionally, 1 publication specifically addressed community empowerment as a keyword. From these, the study organized and examined three perspectives: the role of civic activities within social structures, the concept and definition of community empowerment, and the relationship between individual empowerment and community empowerment. Subsequently, the study conducted discussions based on these perspectives.

Discussion: Community empowerment in civic activities is a process where autonomy at the individual level and the growth of organizations mutually develop, extending from individuals to organizations and from organizations to local communities. Moreover, the development of organizations involves creating needs and services outside existing frameworks, impacting administration and the community, and having the potential to generate new public policies. It is suggested that by empowering participants in activities, this process contributes to the continuous cycle of community empowerment.

Keywords: Civic activities, Community Empowerment, Community Development